

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

## 主宰論説10

### 鳶と松

散歩の途中、雑木林の一角を通った。元々松林だったらしいが、開墾して栗林に模様替えし、3本の高く伸びた松の木だけが残っていた。見上げていたとき、鳶（：とび、カラスかと思われたが違うようだ）が、一本の松の木の頂部に飛び降りるのが目に入った。どうやら樹冠近傍に巣を作っているらしい。このような環境で巣を作るということに、何かうれしような悲しような不思議な感じにとらわれた。ああ、鳥は、このような場所にも住み着いて、たくましく生きるらしい。しばらくして飛び立っていったが、雛のえさを探しに行ったのだろうか？ 鳶のひなの無事な巣立ちを願いたいものである。

俳句：松の木にとびの巣を見たおぼろ春

平成24年4月19日

### 鳶と松（続）

久しぶりに、雑木林の近くを通った。かつての3本松は、完全になくなっていた。木食い虫にやられて枯れたらしく、切り倒されたようだ。鳶は、どこに行ったのだろうか？ かれこれ10年近くになる。時の流れかもしれない。

令和2年9月25日脱稿

俳句：とびは去り松もなくなる秋の暮れ

### 水戸の名所と博物館・美術館巡り

およそ約20年ぶりに、水戸の偕楽園を訪れた。幸い天気は快晴で、梅祭りの最中ということで、賑わいをみせていた。JRの企画で、臨時に偕楽園駅への臨時停車を設定し、アクセスの容易性も功を奏していたと思える。久しぶりに訪れた偕楽園は、梅の名所で、紅梅・白梅入り乱れて咲き乱れていた。ただ、菅原道真さんが、「東風吹かば匂いおこせよ梅の花主なしとて春をな忘れそ」と歌ったのと違い、梅の匂いは、いまひとつだった。偕楽園の一角に、徳川斉昭烈侯が築いた好文亭がある(好文は、梅の異名らしい。中国の晋(しん)の武帝の故事「文を好めば則ち梅開き、学を廃すれば則ち梅開かず」により、梅の異名を「好文木(こうぶんぼく)」といったことから命名されたようだ)。一昨年(2019年)の東日本大震災の時、壁が崩れるような被害があったが、復旧されて、再度開亭されたようだ。木造三階建ての学舎である楽寿楼(らくじゅうろう)と徳川の婦人や女官らのくつろぎの場である平屋の奥御殿が連結した形になっている。楽寿楼の三階からは、千波湖や梅林が眺望できてすばらしかった。その後、徳川記念博物館を訪れた。水戸徳川家の系図やゆかりの品々が陳列されており、歴史を学び、楽しんだ。また、少し離れた水戸市内に、水戸近代美術館があり、岡倉天心、横山大観らの日本画家らの作品を楽しんだ。特に、横山大観

の「生々流転」の絹本水墨画は、圧巻だった。分野は違うが、先人の情熱と偉大な業績に感じ入った次第である。

平成 25 年 2 月 22 日

俳句：梅開く薄桃色の花卉かな

### 生涯設計と寿命

自分で言い出したのだが、生涯設計という考え方がある。最近では「人と環境に優しい」環境調和型生涯設計に変わりつつある。もともと、建築材料・部材を媒介にして、要求される性能/機能を満足させながらも、環境に配慮しながら、生産、輸送、組立/建設、使用/維持・保全、解体、廃棄、リサイクルなどのライフサイクルでの環境負荷を低減する考え方だった。

しかし、いろいろな材料・部材、部品、製品、建造物の設計行為において、寿命あるいは耐用年数を考慮しながら、ライフサイクルでのコストや環境負荷と材料投入量を最小にして、最大の性能及びサービスを得るという考え方として、諸分野に浸透することになった。また、これまで、材料・部材・建造物の寿命評価・予測の話もやってきた。寿命にも、材料・部材の寿命ばかりでなく、人間、動・植物、地球、宇宙に関するものなどいろいろな寿命もあるが、気象予知、地震予知、火山噴火の予知などとともに、いかに寿命予測が難しいかが実感である。しかし、有限の寿命の中で、いかにして、人としての生き方を考え、実行するかをプログラムするのも、生涯設計である。少しでも、実効性向上と精緻化がなされることを期待したいものである。

令和 2 年 9 月 27 日

俳句：人として歩き続ける長い道